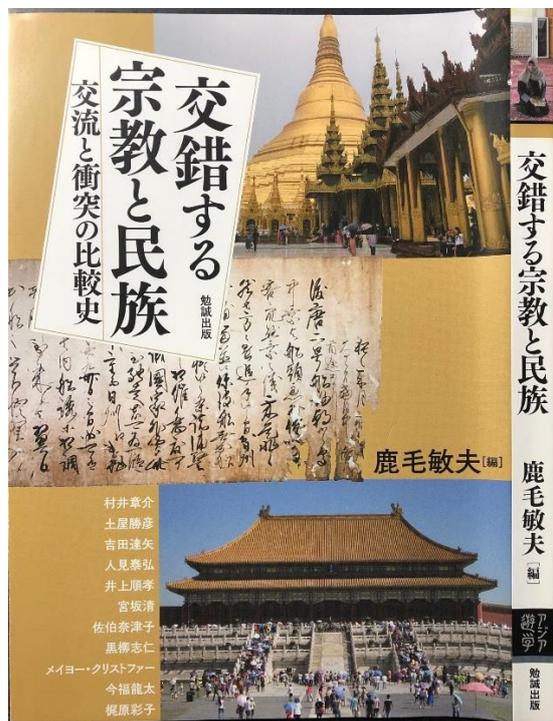


大学助成による学際・国際共同研究成果の紹介

『交錯する宗教と民族 —交流と衝突の比較史—』

本学国際文化学部教員が中心となって進めた学際・国際共同研究の概要とその成果をご紹介します。なお、詳細は、下記書籍をご参照ください。

鹿毛敏夫編『アジア遊学 257 交錯する宗教と民族—交流と衝突の比較史』（勉誠出版、2021年）
https://bensei.jp/index.php?main_page=product_book_info&products_id=101224



混沌の歴史を紐解く

世界に多数存在する異宗教と多民族は、時に激しい対立や交流、融合を繰り返しながら、現代までの歴史を紡いできた。それらは、いかに顕在化しているのか。

アジアとヨーロッパの東西における人の移動と民族の越境・交流の実態、ヨーロッパ社会における政治と宗教の関係、個々の人間の想いとその相克、さらにそこから相対化される「国家」意識の具体的深層に迫る。歴史学・文学・社会学・文化人類学・言語学・地域学・宗教学の分野から多角的に比較検証し、宗教・民族・国家間の共存のあり方を問い直す。

【はしがき】

異宗教・多民族世界の混沌—その歴史と現在

鹿毛敏夫

世界は、様々な宗教を信仰する人々と、多様な民族出自を有する人々であふれている。地球上に存在するこの異宗教と多民族は、過去において、時に激しく対立し、また交流と融合を繰り返しながら、現代までの歴史を紡いできた。この共同論集では、そうした宗教と民族の対立・交流の歴史およびその現在を相対的に検証・評価し、二十一世紀のグローバル化した世界における宗教と民族の共存のあり方を考究したい。

その目的のために、私たちは「宗教と民族の対立・交流の現代歴史学的研究」をテーマとする共同研究グループを、二〇一七年に立ち上げた。四年間の研究計画を定め、具体的には、地球上に存在する異宗教と多民族を原因とした対立と交流の歴史とその現在を、日本・アジア・ヨーロッパの三地域に分けて相対的に検証・評価することとした。

ただし、異宗教と多民族の対立・交流・融合の分析と考察は、多様な分野から多角的な視野のもとで行う必要があるため、歴史学・文学・社会学・文化人類学・言語学・地域学・宗教学等の各専門研究者による各々の個別分野研究での分析手法を融合させる手法をとった。専門分野の異なるメンバーによる学際的研究会や講演会を毎年開催するとともに、日本国内では名古屋(愛知県)や岡谷(長野県)、海外ではミャンマーやオーストリアの考察対象地を選定して共同学際調査を実施し、現地で異なる学問領域それぞれの研究手法を実践し、その手法を批判し合いながら、人文社会学の総体としての成果の掲出を心がけた。この手法は、当初描いていた以上の相乗効果があったと思われる。例えば、二〇一八年に実施したミャンマー学際調査では、多民族国家における少数民族の活動家への社会学的インタビュー調査に、文学・歴史学・文化人類学の研究者も参加して意見交換するとともに、十六世紀の南蛮貿易や十七世紀の朱印船貿易で日本にもたらされた伝統的マルタバン壺窯跡の歴史調査にも、社会学・文学・文化人類学の研究者が同行するなどして、事象の多角的視野からの複眼的考察に努め、また、人文社会学の多様な研究手法を融合することで見えてくる新しい世界観について現地で議論を深めることもできた。





その成果としての本書は、以下の構成として編むこととした。

まず**第1部「流動する民族社会」**では、歴史学・文学・社会学から見た「民族」の移動と越境・交流の実態、そしてその現代的共生の課題について考えたい。

「鎌倉北条氏と南宋禅林一渡海僧無象静照をめぐる人びと」(村井章介)では、鎌倉時代の十三～十四世紀初頭の日本禅宗黎明期に、十九歳の若年で入宋して中国の高僧に随侍し、帰国後に時の政権北条時頼と関わった無象静照という僧侶に着目し、従来ほとんど言及されていないその事蹟を詳細に跡づけるとともに、その時代に日本―中国間を往来した「渡海僧」「渡来僧」と鎌倉武家政権の関係を考察する。

次に、「ドイツ語圏越境作家における言語、民族、文化をめぐる」(土屋勝彦)では、ヨーロッパにおけるユダヤ系ロシア人移民作家や東欧出身移民作家、トルコ人作家等、ドイツ語圏移民作家たちの民族性とその意識について、「越境」する文学という観点から考える。

このようなアジアとヨーロッパの東西における人の移動と民族の越境・交流の歴史は、近現代には一段と活発化し、都市の国際化を進展させた。「近代名古屋にとっての中東―実業界との関係を中心に」(吉田達矢)では、日本におけるそうした国際都市の一例としての名古屋に着目し、特に、明治から昭和中期にかけての名古屋の実業界と中東の関係について分析する。



そして「民族をめぐる対立と交流の位相―滞日ビルマ系難民の国際移動の事例から」(人見泰弘)では、滞日ビルマ系難民の本国離脱から日本滞在、そしてこの十年ほどで見られ始めた本国への帰国に至る過程を通じて、民族をめぐる対立と交流がいかに顕在化するのかを捉え、第1部の展望とする。

続く**第2部「宗教の断絶と叡智」**では、社会学や文化人類学、宗教学等の観点から、「宗教」の融合と衝突・断絶の歴史、および「宗教文化」の多様性・多元性理解に基づく共存への叡智について考える。

宗教の受容と対立の問題は、現代に至る日本の文化に様々な影響を及ぼしてきた。「ボーダレス化する世界と日本の宗教文化」(井上順孝)では、特に二十世紀末からのグローバル化と情報化の加速度的進行がもたらした日本の宗教文化の変容に着目し、ボーダレス化時代における宗教の多様性への柔軟的思考について宗教社会学の観点から考察する。

一方、宗教の断絶と融和の実態解明については、個別地域における文化人類学的観点からの考察も有効である。「ラダックのアイデンティティ運動—もうひとつの「カシミール問題」」(宮坂清)では、インド北部のラダック地方におけるチベット仏教徒による宗教ナショナリズムを取りあげ、十九世紀から現代にかけてのムスリムとの衝突と融和、および近年のヒンドゥー・ナショナリズムの伸張について論じる。

また「インドネシア・アチェ州のイスラーム刑法と人権」(佐伯奈津子)では、東南アジアで最初にイスラームを受容したインドネシア西部のアチェ州をフィールドに、現代イスラーム法による鞭打ち刑やキリスト教会閉鎖等、少数者への不寛容・排外主義の実態を明らかにする。

そして、最終の「宗教と平和—宗教多元社会における戦争」(黒柳志仁)では、宗教学、特に旧約聖書学の観点から、宗教と戦争・政治の問題を取りあげる。ユダヤ教、キリスト教、イスラーム等の一神教がもつ信仰と教義の相違や、ヨーロッパ社会における政治と宗教の関係、および宗教多元社会における閉鎖性の問題を検討して、第2部のまとめとする。

第3部「個の相克と相対化される「国家」においては、前部までで明らかにしてきた地球上の異宗教と多民族の対立・交流・融合の根源にある、個々の人間の想いとその相克、さらにそこから相対化される「国家」意識の具体的深層について、各分野から検討する。

「戦国大名の「国」意識と「地域国家」外交権」(鹿毛敏夫)では、有史以来、中華世界の周辺国の一つとして中国皇帝から「日本国王」に冊封されることで維持してきた日本の国家外交が、十六世紀半ば以降に「国」意識を成熟させた戦国大名による「地域国家」外交権の行使によって、脱中華志向へと性質転化していった実態を歴史的に明らかにする。



また「日本中世の「暴力」と現代の「教育」」(メイヨー・クリストファー)では、日本とヨーロ

ッパ社会における中世的刑罰、特に身体刑の存在に着目し、暴力への耐性の高い社会と国家の特徴およびその意味について、歴史的に考察する。

一方、「一亡命作家の軌跡：西欧キリスト教世界の対岸からフアン・ゴイティソーロのバルセロナ、サラエヴォ、マラケシュ」(今福龍太)では、二〇一七年にマラケシュで没したスペインの亡命作家フアン・ゴイティソーロを題材に、西欧キリスト教世界の非寛容からの決別とイスラーム民衆世界への浸透の軌跡について論じる。

そして、最後の「保育園で働く看護師の語りから考える多文化共生」(梶原彩子)では、現代日本総人口の約二パーセントに上り増加の一途をたどる在住外国人を念頭に、保育園現場看護師の「語り」(ライフストーリー・インタビュー)から、コミュニケーション・生活支援の課題、および多文化共生の地域づくりに向けた問題点についてまとめる。

『日本宗教史』全六巻(吉川弘文館、二〇二〇～二一年)の刊行等、宗教と民族のあり方を模索する研究は、活発かつ重厚な研究史をもつが、本書が目指すような、多分野の研究者による異なる分析手法を駆使した考察を融合させて整理しようとする書物は、意外に多くない。同一学問分野の研究者が集った共同研究とその成果論集は、確かに研究対象を深く掘り下げて考察する奥深さがあるものの、一方で、研究のベクトルが同一のため予定調和的な結論になりがちである。宗教と民族の課題は、多種多様な広がりをもつことに最大の特徴があり、例えば、実証主義の歴史学では分析できない事象が、人間の心象に切り込む文学からの分析によって、容易に課題解決できることがある。読者には、地球上の「異宗教」と「多民族」が織りなす混沌の世界をむしろ堪能しつつ、そこから生じる課題に多様な角度から切り込んでいく人文学の諸学問分野の特徴も感じ取りながら、各論考を読み進めていただきたい。

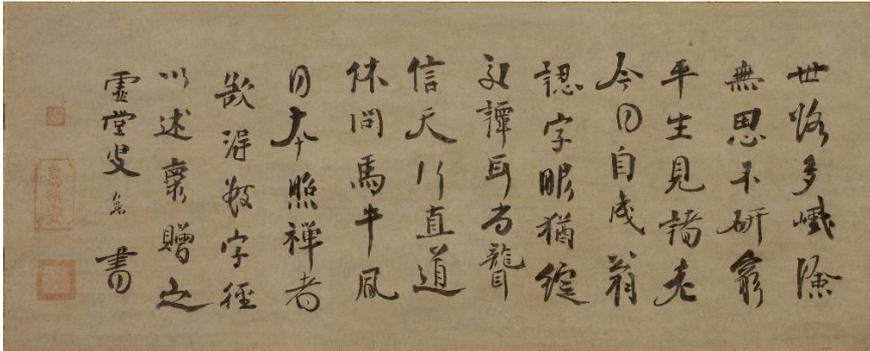
第1部 流動する民族社会

(1) 鎌倉北条氏と南宋禅林一渡海僧無象静照をめぐる人びと 村井章介

[論文要約]

禅僧無象静照は北条得宗家や鎌倉の聖・俗界と南宋禅林を繋ぐキイパーソンである。北条時頼の近親で、東福寺円爾に学び、一二五二～六五年に入宋して高僧石溪心月・虚堂智愚に随待し、また渡来僧蘭溪道隆・大休正念・無学祖元と親交を結んだ。時頼の子宗政の菩提寺浄智寺は、無象が住持のとき鎌倉五山に列せられた。

[著者プロフィール(本書刊行時)]むらい・しょうすけ 東京大学名誉教授。専門は東アジア文化交流史。主な著書に『日本中世の異文化接触』(東京大学出版会、二〇一五年)、『東アジアのなかの日本文化』(北海道大学出版会、二〇二一年)、編著書に『東アジアのなかの建長寺一宗教・政治文化が交叉する禅の聖地』(勉誠出版、二〇一四年)、「日明関係史研究入門」(勉誠出版、二〇一五年)などがある。



(2) ドイツ語圏越境作家における言語、民族、文化をめぐる 土屋勝彦

[論文要約]

ドイツ語圏の越境文学においては、異なる宗教・民族・文化間の衝突と相互影響の諸相が描かれるとともに、他者の意識から生まれる言語表現の革新性や規範的言語からの逸脱、さらには混成的言語表出に至る場合もあり、それが「国民文学」の多様性と豊饒性、そして世界文学への参与を促進する可能性をもたらしている。

[著者プロフィール(本書刊行時)]つちや・まさひこ 名古屋学院大学国際文化学部教授。専門はドイツ現代文学・比較文学。主な著書に『反響する文学』(編著、風媒社、二〇一一年)、『越境する文学』(編著、水声社、二〇〇九年)、『オーストリア文学小百科』(共編著、水声社、二〇〇四年)などがある。

(3) 近代名古屋にとっての中東—実業界との関係を中心に 吉田達矢

[論文要約]

近年、名古屋にとっての中東は重要な地域のひとつといえる。それでは、名古屋と中東地域との関係はいつから始まり、どのような経過を辿ってきたのだろうか。本稿では戦前期における、両者の貿易、中東地域に対する名古屋の実業界の動向を検討するとともに、それに関連した東京・大阪の諸団体などの位置づけについても考察した。

[著者プロフィール(本書刊行時)]よしだ・たつや 名古屋学院大学国際文化学部准教授。専門はオスマン帝国史、名古屋と中東地域の関係史。主な論文に「戦前期における在名古屋タター人の交流関係に関する一考察」(『アジア文化研究所研究年報』第四八号、二〇一四年)、「オスマン帝国領エピルス・テッサリア両地方における一八五四年の騒乱に関する一考察」(『明大アジア史論集』第二二号、二〇一八年)、「外国人からみた明治時代の名古屋」(『名古屋学院大学論集：人文・自然科学篇』第五六巻第一号、二〇一九年)などがある。

(4) 民族をめぐる対立と交流の位相—滞日ビルマ系難民の国際移動の事例から 人見泰弘

[論文要約]

民族現象を自他集団間の境界構築作用から捉えるとき、滞日ビルマ系難民には二つの境界形成がみられた。すなわち多民族的背景と迫害経験に基づく民族集団間の境界形成と、移住経

験の有無に基づく民族集団内の境界形成である。民族集団内外における境界形成は、受け入れ国日本での同化や統合とともに出身国ビルマの動向によっても大きく変わってゆくだろう。
[著者プロフィール(本書刊行時)]ひとみ・やすひろ 武蔵大学社会学部准教授。専門は国際社会学。主な編著に『難民問題と人権理念の危機—国民国家体制の矛盾』(明石書店、二〇一七年)、論文に「ASEAN のトランスナショナリズム」(西原和久・樽本英樹編『現代人の国際社会学入門—トランスナショナリズムという視点』有斐閣、二〇一六年)「戦後日本の難民政策受入れの多様化とその功罪」(移民政策学会設立 10 周年記念論集刊行委員会編『移民政策のフロンティア—日本の歩みと課題を問い直す』明石書店、二〇一八年)などがある。



第 2 部 宗教の断絶と叡智

(1) ボーダレス化する世界と日本の宗教文化 井上順孝

[論文要約]

二十一世紀には日本社会でグローバル化や情報化が急速に進行している。ボーダレス化現象はさまざまな形で生じ、宗教現象にも及んでいる。日本宗教が欧米やアジアなど世界各地に広がり、国外から多様な宗教が到来している。宗教習俗にもボーダレス化は起こっている。多様な宗教文化への配慮が強く求められる時代を迎えている。

[著者プロフィール(本書刊行時)]いのうえ・のぶたか 國學院大學名誉教授。専門は宗教社会学、認知宗教学。主な著書に『グローバル化時代の宗教文化教育』(弘文堂、二〇二〇年)、『世界の宗教は人間に何を禁じてきたか』(河出書房新社、二〇一六年)、『宗教社会学を学ぶ人のために』(編著、世界思想社、二〇一六年)などがある。

(2) ラダックのアイデンティティ運動—もうひとつの「カシミール問題」 宮坂清

[論文要約]

本稿はインドのラダックで展開されてきたアイデンティティ運動を、カシミールやインドとの関係において捉え、もうひとつの「カシミール問題」として提示する。インドはセクラーリズムを国是とするが、仏教、イスラーム、ヒンドゥー教といった宗教コミュニティの対立がこれらの問題に深く関わり、その解決を困難にしている。

[著者プロフィール(本書刊行時)]みやさか・きよし 名古屋学院大学国際文化学部准教授。専門

は文化人類学、宗教社会学。主な論文に「神々に贈られるバターーラダックの遊牧民による乳加工と信仰」(鈴木正崇編『森羅万象のささやきー民俗宗教研究の諸相』風響社、二〇一五年)、「インド、ラダックにおける仏教ナショナリズムの始まりーカシミール近代仏教徒運動との出会い」(櫻井義秀編『現代中国の宗教変動とアジアのキリスト教』北海道大学出版会、二〇一七年)、「日本におけるチベット仏教ーダライ・ラマ来日時の交流を手がかりに」(『日本における外来宗教の広がりー21世紀の展開を中心に』宗教情報リサーチセンター、二〇一九年)などがある。

(3) インドネシア・アチェ州のイスラーム刑法と人権 佐伯奈津子

[論文要約]

三十年におよぶ紛争が終結したインドネシア・アチェでは、イスラームの名のもとに、または伝統・文化を理由に、普遍的な人権原則に反するような権利の制限や、少数者への不寛容・排外主義などが高まっている。本稿では、イスラーム刑法に関する条例をめぐる議論を整理し、新たなかたちの暴力が発生するにいたった背景、政治的文脈を考察した。

[著者プロフィール(本書刊行時)] さえき・なつこ 名古屋学院大学国際文化学部准教授。専門はインドネシア地域研究。主な著書に『アチェの声ー戦争・日常・津波』(コモンズ、二〇〇五年)、『現代インドネシアを知るための80章』(明石書店、二〇一三年)、『平和をめぐる14の論点』(法律文化社、二〇一八年)などがある。

(4) 宗教と平和ー宗教多元社会における戦争 黒柳志仁

[論文要約]

国際社会におけるテロ、戦争、紛争などの問題を、比較宗教の視点からクローズアップする。宗教がもつ信仰、教義を通して、いかにグローバル化社会の中で共生・共存していくのかを考察する。異なる宗教の特徴や相違について、歴史・思想的な知識や認識を得ることを目的にしている。

[著者プロフィール(本書刊行時)] くらやなぎ・ゆきひと 名古屋学院大学国際文化学部准教授。専門は旧約聖書学、比較宗教学。主な論文に「思い出の中にある将来ーユダヤ民族の歴史と詩編90編の時間性」(『名古屋学院大学論集』二〇一六年)、「詩編とコヘレトの言葉における「永遠」について」(『名古屋学院大学論集』二〇一七年)などがある。



第3部 個の相克と相対化される「国家」

(1) 戦国大名の「国」意識と「地域国家」外交権 鹿毛敏夫

[論文要約]

有史以来、中華世界の周辺国の一つとして中国皇帝から「日本国王」に冊封されることで維持してきた日本の国家外交は、中世後期に大きく変質する。「国」意識を成熟させた戦国大名による「地域国家」外交権の行使により、特に十六世紀半ば以降に、脱中華志向の外交（脱「日本国王」外交）へと性質転化していったのである。

[著者プロフィール(本書刊行時)] かげ・としお 名古屋学院大学国際文化学部教授。専門は日本中世史。主な著書に『アジアのなかの戦国大名—西国の群雄と経営戦略』(吉川弘文館、二〇一五年)、『戦国大名の海外交易』(勉誠出版、二〇一九年)、編著に『大内と大友—中世西日本の二大大名』(勉誠出版、二〇一三年)、『描かれたザビエルと戦国日本—西欧画家のアジア認識』(勉誠出版、二〇一七年)、『戦国大名大友氏の館と権力』(共編、吉川弘文館、二〇一八年)、『硫黄と銀の室町・戦国』(思文閣出版 二〇二一年)などがある。



(2) 日本中世の「暴力」と現代の「教育」 メイヨー・クリストファー

[論文要約]

前近代の日本社会の大きな特徴の一つに暴力があり、それは戦場のみならず、日常生活にも浸透していた。最も衝撃的な例の一つは、顔面に対する暴力である。本稿では、当時の社会における暴力使用の意味と、顔面への暴力が現在の国内外の教科書に取り上げられる意義について考察していく。

[著者プロフィール(本書刊行時)] Christopher M. May 皇學館大学文学部コミュニケーション学科教授。専門は日本史全般であるが、とりわけ日本文化史、日本中世史の研究を中心としている。主な著作に『Swearing Oaths and Waging War: People, Place, and Ritual Practice within the Ōtomo Warrior Band in Sixteenth-Century Japan』(皇學館大学出版部、二〇一九年)、『Communities and Sacred Spaces: Canterbury and Ise in Historical and Cultural Context』(編、皇學館大学、二〇二〇年)などがある。



(3)一亡命作家の軌跡：西欧キリスト教世界の対岸からーファン・ゴイティソーロのバルセロナ、サラエヴォ、マラケシュ 今福龍太

[論文要約]

二〇一七年六月四日、作家ファン・ゴイティソーロがマラケシュで八六年の生涯を閉じた。本稿はスペイン人としてバルセロナに生まれ、フランコ体制下にパリへ亡命し、内戦下サラエヴォでの戦取材を経てモロッコのイスラーム民衆世界に自らの魂の拠り所を定めた、一人の反体制知識人の苛烈な精神遍歴をたどる。

[著者プロフィール(本書刊行時)]いまふく・りゅうた 東京外国語大学名誉教授。専門は文化人類学。主な著書に「群島一世界論」(岩波書店、二〇〇八年)、「ミニマ・グラシア」(岩波書店、二〇〇八年)、「ヘンリー・ソロー 野生の学舎」(みすず書房、二〇一六年)などがある。

(4)保育園で働く看護師の語りから考える多文化共生 梶原彩子

[論文要約]

本稿は保育園看護師のライフストーリーから、外国人住民像(保育園の外国人住民から地域社会を生きる住民へ)、対応(職業観に基づく対応に一個人としての思いに基づいた個人レベルの対応を加えていく)への意識変化、多文化共生観の形成(個人レベルでなく制度やシステムに落とし込んだコミュニティーの在り方へ)を考察した。

[著者プロフィール(本書刊行時)]かじわら・あやこ 名古屋学院大学国際文化学部任期制講師。専門は現代日本語学(意味論)、日本語教育。主な著書に『すくすく日本語会話1』(共著、Wit&Wisdom、二〇〇八年)、論文に「程度性と百科事典的知識の活性化ーカテゴリー帰属を表すヘッジ表現として働く程度副詞の名詞修飾」(『日本認知言語学会論文集』第一五巻、日本認知言語学会、二〇一五年)、「ザ」の働きについてー百科事典的意味観からの考察」(『日本語用論学会第19回大会発表論文集』第一二巻、日本語用論学会、二〇一七年)などがある。

【あしがき】

本書は、名古屋学院大学研究助成「宗教と民族の対立・交流の現代歴史学的研究」(研究期間:二〇一七～二〇年度、研究代表者:鹿毛敏夫)による研究成果の一部である。人文系研究への予算が削られる昨今の学問的情勢のなか、この学際共同研究の意義を理解し、当大学の課題研究の一つとして助成採択いただいたことに、まずはお礼申し上げたい。

ここに、多分野の研究者が集った本研究グループによる四年間の研究軌跡を記しておきたい。

[二〇一七年度]

- ・第一回全体会議(六月十四日)
- ・第一回講演会・ワークショップ(十二月二日)
 - ・村井章介(歴史学)「鎌倉北条氏と南宋禅林—無象静照をめぐる人びと」
- ・第一回研究報告会(一月十日)
 - ・佐伯奈津子(地域研究)「インドネシア・アチェ州におけるイスラーム刑法適用と人権」
 - ・鹿毛敏夫(歴史学)「十六世紀日本の戦国大名権力とイエズス会・中国明朝—その相互認識」

[二〇一八年度]

- ・第二回全体会議(六月十七日)
- ・第二回研究報告会(六月十七日)
 - ・黒柳志仁(宗教学)「ヨーロッパ社会における脱宗教(ライシテ)について」
 - ・メイヨール・クリストファー(歴史学)「文学と歴史の接点における戦国の記憶形成」
- ・第一回共同学際調査(ミャンマー、八月二十四～二十八日)



- ・第二回講演会・ワークショップ(十一月二十四日)
 - ・今福龍太(文化人類学)「一亡命作家の軌跡:西欧キリスト教世界の対岸から—バルセロナ、サラエヴォ、マラケシュ」
- ・第二回共同学際調査(長野県岡谷市、三月六～七日)

[二〇一九年度]

- ・ 第三回全体会議(六月二十九日)
- ・ 第三回研究報告会(六月二十九日)
 - ・ 宮坂清(文化人類学)「インド・ラダックのチベット仏教ナショナリズム」
 - ・ 梶原彩子(現代日本語学)「日本人の外国人受容プロセス—保育所における看護師の職業意識の変容から」



- ・ 第三回共同学際調査(オーストリア、九月二～八日)
- ・ 第三回講演会・ワークショップ(十二月一日)
 - ・ 井上順孝(宗教社会学)「ボーダレス化する世界と日本の宗教文化」

[二〇二〇年度]

- ・ 研究成果執筆活動(四月～八月)
- ・ 第四回共同学際調査(愛知県名古屋市、十一月十八日)
- ・ 成果論集編集活動(十月～三月)

上記の他に、二〇一六年度には本研究の前身研究グループによる研究報告会(十二月二十一日)を開き、人見泰弘「ビルマ系難民と祖国の民政化—移民トランスナショナリズムの視点から」、および吉田達矢「近代の名古屋と「回教圏」との関係に関する研究—「印度」との関係についての中間報告」をもとに、学際的議論も行った。

近年に編まれた『キリスト教と寛容—中近世の日本とヨーロッパ』(慶應義塾大学出版会、二〇一九年)の編者の一人、野々瀬浩司氏は、同書の終章「全体の総括と寛容の問題を理解するための視角」において、宗教的寛容の概念が時代性や地域性において個別の意味をもつものであり、また、他者への敵意を抑える気持ちと結びつく寛容が、常に不寛容に転換しうる危うさを有する側面を強調する。その上で、宗教的寛容の問題を、思想史のみでなく、哲学・政治学・社会学・宗教学・文学等から学際的に分析することの有効性を指摘している。

十三世紀鎌倉時代の渡海僧の活動や、十六世紀戦国大名の国家外交権意識という歴史的事象から、二十一世紀現代の移民・難民・亡命あるいはマイノリティの問題、宗教ナショナリズムの動向と暴力・戦争、そして多文化共生の地域づくりの課題に至るまで、地球上の「異宗教」と「多民族」が表出する分析課題の裾野は広い。本書の論者十二名が織りなす多分野融合によるこの実験的考察が、宗教と民族の共存への指針をわずかでも示すものとなり得ているならば、望外の喜びである。

二〇二一年六月六日

研究代表者 鹿毛敏夫